

風土



寒桜

神蔵

器

初音きくわれ三尺の子のごとく

二日はや坐右の銘に「無」一字

東京に二花三花咲く寒桜

近きより遠くの風のがやけり

冬の鴟城太郎みて桂郎みて

激痛の胸よりたつは蝶か蜂か

正行の歌詠みすつる花吉野

木の上に明恵上人笹子鳴く

霜柱芭蕉金言百あまり

武相社

年賀状郵便受に白一つ

如月や二十二日の誕生日

一羽来て百羽が庭に初すずめ



竹間集

同人作品



冬ぬくし

鈴木 石花

桂郎の四十回忌茶が咲けり
方運山青柳寺まで冬ぬくし
二十階に眼の高さなる雪の富士
ひと月後の眼科予約や年の暮
裏千家師範施設長初点前
正面に赤城職域初マラソン
競艇果つ水面平に寒満月

蓬萊飾り

岩木 茂

寒卵桂郎明史に一つづつ
浦嶋の里の蓬萊飾りかな
吉書揚ぐんぐん海の青くなる
橋立や九世戸の茶屋の鳥総松
山彦に海彦に雨寒九かな
羽蒲団夢にも時の流れをり
天上山本町子さんの若菜を摘みに逝かれけり

冬 館

相沢有理子

亡き姉の長逗留の避寒宿
泊まり客風呂吹きに頬かがやかす
踏切に老いの足踏み冬うらら
初夢のとぎれとぎれに唇乾く
よその児が泣く外廊下月冴ゆる
冬館粗樫の森楯として
ゆづり葉の庭にしやがむや野鳥鳴く

春 着

小林 輝子

たまゆらの暁をまぶしみつ木独楽挽く
都より^レ狗日の客やこけし描く
三が日かかさず雪を掻きにけり
母の世のそのまた母の世の春着
心まで 悴み 仰ぐ 大 楳
寒風に押されて詣づ正一位
ひとつづつ家の灯消ゆる雪女郎

雪後の天

田村すゝむ

寒夕焼杭一本を火柱に
啄木の雪の釧路の新聞社
門松を立てて馬術部厩舎かな
ピザ^{ピザレストランにて}生地を雪後の天へ放り上ぐ
波音を殺し流水接岸す
四温日和俳句ポストに句を投ず
文鳥籠吊つて春待つ珈琲館

早 春

塩田 博久

風花ややぐらの奥に虚子の墓
予定なきひと日や庭に春の雪
春信の画集を膝に窓の雪
雪はげし鎖鳴らしてバスの発つ
町騒を覆ひて積もる春の雪
入試終へサツカーの子に戻りけり
のどけしや猫駅長の居眠りも

松 匂 ふ

田中佐知子

元朝や古今伝授の松匂ふ
城門に反る鯨や羽子日和
元伊勢や千木金色に年明くる
代々を網元として飾海老
京なれや「松葉」の蕎麦も松の内
新雪の深々とあり産盥
四日はや豆腐屋は湯気噴出せり

春へ

浅田光代

米塩に雪の降りごむ山祠
左義長も粥占ひも雪のなか
左義長の鈴放りたる火勢かな
杉の秀の揺れはじめたる大とんど
粥占や神主の足袋雪濡れに
粥占の湯気立つ鍋へ祝詞あぐ
あをあをと鍋に躍りて粥の筒
悴める両手に享けて小豆粥
春を待つ村の要の楠大樹
鏡台にわれも仕舞はむ懸想文

山河集

同人作品



神蔵
器選

僧一人薬師如来の煤払ふ
下山田美江

三十三札所その一除夜の鐘
あづまやに釣釜たぎる冬の梅
研ぎ上げて指に刃を当つ冬の星
書初や万葉仮名の十七字

破魔矢受くさねさし柑模一の宮
落合絹代

探梅の木立を抜けて象に逢ふ
武蔵野の林四方より淑気満つ
文も絵も一筆にして寒見舞
飛梅や筆供養の炎立ち上がる

霜柱諫言一語にて足りる
豎山道助

佗助や眸のみ父似の子が四人
寅彦忌濃い目のブルーマウンテン

日脚伸ぶ国境渡る乳母車
初夢の一足す一も二でありし

湯田温泉瑠璃光寺 四句

寒椿 国宝の塔に一礼す
杉本葉王字

国宝の塔より上る冬の虹
気の満ちて白梅となる一枝あり
後生車回せば立ちぬ冬の虹

「杓底一残水」の碑あり

鴉の声杓底に水残りけり

愼野あき子

今日といふ未知の明けゆく白椿
山椿ぼとりと池に春動く
大銀杏未完の塔は黄葉の中
初氷朝日に乗せて輝けり
極寒はぐいつと肩を掴むなり

◇特別作品◇(抄)

崖線の道

内藤 静

凍雲の開けて武蔵国分寺
歌並べ万葉園はまだ萌えず
お薬師は秘仏にます梅二輪
青木の実ありて明るし仁王門
真姿すがたの池とは冬の日を湛ふ
春近し鏡瓦の蓮華文
冬鳥と歩を合せ行く尼寺の跡
囀まの東山道にいち早し
崖線けあれば水湧きいづる冬木道
春の川ながれて光とどまれり

風土集



神蔵器選

書初す一行だけの母の詩 阿南 島 玲子
春待つやおにぎりむすぶたなごころ
小正月祖父の句を読む蔵の中
編みかけの母のシヨールの仕上がらず
冬木の芽思ひ思ひに天をさし

伊賀上野

五條 上辻 蒼人

煤逃げの先客の居て芭蕉館
伊賀上野忍町時雨れあたりけり
雪雲の割けて日の差す登城口
笹子鳴く日溜りの川向かひ
北風を右から受けて翁塚
約束のやうに雪降る母の忌日
七日粥土鍋の蓋に穴一つ
三寒の四温を待てる道祖神
待ち合はす四温の銀座四丁目

川崎 水井千鶴子

日脚伸び坂を降り来る乳母車
橋よりの声を微塵に北吹けり 津山 生田 作
林道を鎖で閉ざし山眠る
雪嶺の奥に雪嶺鳥つぶて
黒猫の舌こまやかに寒の水
切り返す堆肥の温み雪ぼたる
初暦夢の扉を開きけり 福島 石井悦子
遠き日のクラスメートの初便り
未来てふ希望ふふみて冬木の芽
涙とは温きもの冬の薔薇
冬の灯や机に初版広辞苑
初富士や波立ち上がる駿河湾 川崎 森田節子
初詣今年は女坂を行く
初雀光をこぼし降り立ちぬ
少年の書は正面にどんど焼く

どんど火の煙沁みたる髪すすぐ
川一本村に通して年迎ふ 伊東 吉永すみれ

短日や一筆箋の走り書き
大室山緋寒桜の灯を点す
落し蓋踊りだしたる寒夜かな
獣罫をしかけ山の眠りけり
雪道をチェーン走る家族かな 大分 工藤はるみ

身の内の熱きものあり去年今年
初詣宇佐神宮の砂利の音
月までの真つ直ぐな道恵方とす
振り向けば山ふりむけば冬苺
初日さす千の鳥居に千の文字 福生 雨宮桂子

梵鐘の いっ口 こ二 に口 こう春隣
臘梅や一語こぼれてまた一語
左義長のどんぐりまなこ整列す
み仏もかがみて雪見障子かな
初富士を崇めし御坂峠かな 川崎 鈴木庸子

指揮棒の先が天向く冬木の芽
手付かずのクーポン券や年明ける
墨打たる角材にある淑気かな
黒潮の風に猛りしどんだかな
焚火守独りの貌を照らし出す 津山 生田恵美子

枯園の水音空へ立ち上がる
七段に松を仕立てて春待てり
履き古りし下駄に左右や春隣
室咲のコイン一つで足りる鉢
雪女島田の宿を去りしとぞ 舞鶴 福田周草

大寒や本所松坂吉良屋敷
黒羽や翁の道の 枯野人
田中にどんど焼きたり少年団
祖母が手の薙刀胼胝や小豆粥
真夜中の無言電話や噓落つ 川崎 井口光石

長々と貨車鉄橋に寒怒濤
昼月や磯の捨て餌に寒鴉
紅餅の御前汁粉や夕霧忌 武蔵

豪邁たる白隠の「日日」梅真白
幼な子の頬ふくらみぬ寒雀 川崎 遠藤逍遙子
我が町は坂道多し寒椿
御降りや温泉気分の風呂を焚く
出初式江戸伝統の梯子乗り
十二月八日と師走の十四日
ひかり合ふ句碑と三山竜の玉 藤枝 間島あきら
捨て鐘に始むる京の年忘れ